

データ番号	103 (資料2)
効用の種類	色・形による生理・心理的効用
見出し	緑が望める病室では患者の治りが早い
出典	(『生活空間における花と緑の効用・機能に関する調査報告書』(財)日本花普及センター1996) 「植物の室内環境や心身に及ぼす効果」九州大学農学部教授・松尾英輔
内容	*Ulrichの報告によると、病院において窓から樹木の見えるベッドにいる患者と見えないベッドにいる患者の術後の経過を比較した結果、前者は痛み止めの投薬が軽くすみ、不定愁訴も少なく、治りも早かった。
備考	*「Ulrich, R. S. 1984. View through a window may influence recovery from surgery. Science 224, 420-421」より 〈参考〉その他、窓から見える緑の効果 <ul style="list-style-type: none"> ・緑が見える部屋の服役者は、見えない部屋の服役者と比べ頭痛、胃痛が少ない ・自然の風景が見える部屋で働く労働者は、人工物しか見えない部屋の労働者と比べ、ストレスが少なく、仕事に満足感を覚え、不快感や頭痛を訴えることが少ない

出典：九州大学農学部教授・松尾英輔「生活空間における花と緑の効用・機能に関する調査報告書」
(財)日本花普及センター「植物の室内環境や心身に及ぼす効果」1997)

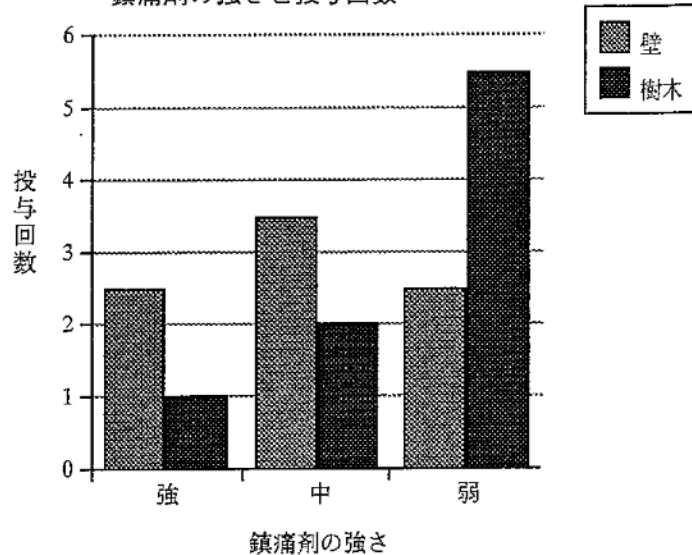
◆窓から見える風景の差による病気の回復状況

(Ulrich,R.S. 1984. View through a window may influence recovery from surgery.Science 224: 420-421. より)

窓から、外の植物（樹木）がみえるベッドにいる手術後の患者と、外の植物が見えない（壁が見える）ベッドの患者とを比較すると、前者は、投与鎮痛剤は弱いものが多く、痛みの感じ方が少なかったことがわかる。

また、術後の経過を比べると、植物が見えるベッドの患者のほうが、退院までの日数が短く、併発症状も少なく、順調に回復したことがわかる。

▼病室の窓から見える風景の差による鎮痛剤の強さと投与回数



▼病室の窓から見える風景の差による患者の術後の経過

項目		壁が見えるベッド	樹木が見えるベッド
退院までの日数		多	少
患者に関する看護婦のコメント	プラス	あまり差がない	
	マイナス	多	少
鎮痛剤の投与回数		術後1日目、および6～7日目にはほとんど差がない 2～5日目については上図を参照のこと	
安定剤の投与回数		ほぼ同じ	
併発症状		多	少